

かゝしなんかいやだね

高 島 巖

あるところに、お父さん犬ミ、おばあさん犬ミ、子犬が
住んでゐました。

子犬のお名前は、兄さんの方をチリ、妹の方をボリミ云
ひました。

チリミボリは、あんまりおいかうな兄妹ではありません
でした。

*

「う、……………あーあ、また夜があけたぞ。おい、ボリ」
「う、……………あーら、また夜があけたわ、あら、チリ、
もう起きてたの？」。

「おい、なにをねぼけてゐるんだい（僕が起してやつたん
ぢやないか）」。

「あら、さうぢやないわよ。あたし、自分で起きたのよ。」

「さうぢやないよ。僕が起してやつたんだよ。」

「あら、さうぢやないわよ。あたし、自分で起きたのよ。」

「さうぢやないよ。僕が起してやつたんだよ。」

「あら、さうぢやないわよ。」

「さうだよ。」

「さうぢやないわよ。」

「さうだつてば。」

そこへ、おばあさん犬が、前かけのはじで手を拭きなが
ら、やつて來ました。

「これこれ、なんだね、朝からけんくわなんかして、しよ
うのない子供たちだな。さあさ、早く起きて、お着物をき
かへて、お顔をあらつて、おそこへ出てごらん、お天氣が
よくつて、それはいい氣持だよ。」

「僕が起してやつたんだい」

「あたしが起きたのよ」

「僕だよ」

「あたしよ」

「まだやつてるのね、この子たちは」

「僕だいたい」

「あたしよ」

そんなことを云ひながら、でも、二人は着物をきかへにかかりました。

*

「おい、ボリ」

「なによ」

「今日もまた、いいお天氣のやうだから、きこかへ遊びに行かうか」。

「ええ、行きませう。ほら、原つばの向ふの、あのお家を建ててるところはごう？」

「うむ、さうだ、あそこへ行つて、木の切れつばじや藁つくつで遊ぼう」

「ええ、ええ、それがいいわ、それがいいわ」

チリミボリは、朝ごはんを済ませます、早速、おそごへミび出しました。

*

チリは、青いお洋服に縞のツボン。

ボリは、赤いお洋服に格子のスカート。

「おい、ボリ。早く歩かなくちや駄目ぢやないか」

「歩いてるぢやないの」

「歩いてるつて、早く歩くんだよ」

「今、早くするわよ」

「なんでも、おそいやつだなあ」

「あら、なんでもつて、なにがなんでもなの？」

「さうぢやないか、けさのこと、もう忘れたのかい？」

「けさのこと？」

「けさは、僕か先に起きて、僕が起してやつたんだよ」

「あら、まだあんなことを云つてるわ、あたし、自分で起きたのよ」

「うむ」

「ちがふよ、僕が起してやつたんだよ」

「もうぢやないわよ」

「さうだよ」

「うそよ」

「ほんまだよ」

そんなことを云つてゐるうちに、二人は、もう、原つばの向ふの、お家を建ててゐるところへやつて來ました。

*

「お早よう、おぢさん」

「ああ、お早よう」

「おぢさん、大工さんだね」

「さうだよ、大工さんだよ」

「おぢさん、よく働くねえ」

「そりやさうさ、お前たちみたいに、朝起きてごはんを食べるさうさ、お家のお手傳ひもせず、こんなところへまゐり出して來て、人のじや、ま、なんかしないよ」

「あら、あら、あら、あら、じゃまなんかしないわ」

「お前たち、けふ、何時に起きたい？」

「七時よ」

「えッ？、七時？随分お寢坊だね」

「七時ぢや、おそいの？」

「さうさ、おぢさんなんか、五時に起きて六時には、もう」

「ここへ來て働いてゐるんだよ」

「へえ」

「お前たち、お家のお掃除を手傳つたところあるかい？」

「なら」

「さうして？」

「そりやさうさ、お家のお掃除は、おばあさんがするもの」

「それぢや、朝起きてごはんまで、なにをしてゐるんだい

？」

「だまつて、立つて見てゐるわ」。

「へえ、それぢや、かかしてみたいぢやないか」。

「えッ、かかし？」

「さうさ、なんにもしないで立つてゐるのは、かかしだよ」

「？」

「なんでもいいよ。おぢさん、木つくつを少し呉れない

*

チリボリは、おひるごはんの時、ちよつこお家へ歸つた
きり、一日中、その仕事場で遊び通しました。

*

「しよのない子供たちだねえ、今頃まで、きこでなにを
してゐるんだらうねえ。」

「ほんさうだよ。でもまあ、子供のこみだから仕方がない
よ、もう歸つて來るだらう。」

お家のなかには、もう電氣がついてゐました。お父さん
犬もおばあさん犬も、ごはんが濟んで、夜のお仕事にかか
るころでした。

入口のところで、「ドンドンドンドンドンドン、ドンドン
ドンドンドンドン」ミ、戸をたたく音がしますので、おばあ
さん犬。

「だれだい？、チリボリかい？」

「チリだよ」

「ボリよ」

「ほら、歸つて來ましたよ、お父さん」

「おばあさん、あけて」

「おばあさん、あけて頂戴」

「自分たちであけられないのかい？」

「あけられないんだよ」

「さうして？、お前たちに手がなくなつたのかい？」

「ううん、さうぢやないよ」

「持つて來たの」

「手があるんなら、自分たちであけて入つたらいいだら
う。」

「ミころが、その手が駄目なんだよ、持つてゐるんで」

「なにを持つてゐるの」

「ミ云つて、おばあさん犬が戸をあけますミ、チリもボリ
も、兩わきに、木つくづや藁つくづを一杯かかへてゐます。

「まあ、そんなもの、きこから持つて來たの」。

「ううん、これでお家をこしらへて遊ぶんだい」

チリボリは、その木つくづや藁つくづを、ばらばらこぼ
しながら、入つて來ました。

「これこれ、折角お父さんがお掃除をしたばかりなのに、

叱られますよ。」

「おい、チリホリ、かたづけなさい」

こうこう、お父さん犬に叱られてしまいました。

「はい。」

いやいや落した木つくづミ藁つくづをひろひますミ、チリ。

「おばあさん、僕、おなかかペコペコ」

「よしよし、今あけるよ」

「おばあさん、あたしも」

「おばあさん犬は、ふたりにごはんを食べさせるミ、すぐにお床の仕度をして、ふたりにも寝かせてしまひました。」

「しょうがないね、おばあさん。あの働きものの大工犬のミころへでも少しあづけてみたらどうだらうね、あそこにはよく働く子供たちがたくさんゐるからねえ」

「でもねえ、まだ子供だから、今に少しはよくなつて呉れるだらうよ、まあ、もう少しの辛棒だよ」

お父さん犬ミおばあさん犬は、夜のお仕事をしながら、こんなおはなしをしてました。

*

なんだか、その邊がばーツミあかるくなりました。

「おやあ、變だぞ。こんなあかるさ、僕、見たことないよ」

「あら、随分綺麗な色ね、まるで紫色にお乳をミかしたやうだわ」

「晝かしら、それミも夜かしら」

「ミつちでもないわ」

そんなミミを云ひながら、じいツミ見てのますミ、ミころからミもなく、チヨン、チヨン、チヨン、チヨン、チヨン、チヨン、チヨン、チヨン、チヨンミ、丁度大工さんがお仕事をしてゐるやうな變な音がきこえて來ました。

するミ、今までなんにもなかつたミころへ、地面から、ひよろひよろひよろツミ、棒が一本出て來ました。

「ああ、棒が生えて來たぞ」

「あら、あら、あら、あら、ふへて來るわ」

ミ思つて見てゐるうちに、その棒がなん本にもなん本にもわかれて、こんきは、一本つつ、ふらふらミ歩きはじめました。立つたり坐つたり横になつたり。そのうちに一軒

のお家が出来あがりしました。

「ははあ、お家が出来たな」

「あら、不思議ね」。

お家の真中に、大工のおぢさんが眠つてゐました。

「おやおや、大工犬のおぢさんだ」

「ええ、ええ、さうだわ、さうだわ」

ミ、なほよく見てゐますミ、こんきは、ここから出て来たのか、小さな子犬がたくさん出て来て、ひこりがは、うきでお部屋をはき出すミ、ひこりが水をくんで来て、ふき掃除をする、ひこりが薪を持つて来て火をつけるミ、ひこりがその上にお米の入つたお釜をかけてごはんをこしらへる、ひこりがお膳を持つて来るミ、ひこりがお茶碗を持つて来てその上にのせる。

こんな風で、すっかりお仕度が出来てしまふミ、こんきはみんなて手をつないで、大工犬のおぢさんのまわりをこりかこみました。

「一、二、三」

一番大きな子犬が號令をかけますミ、皆なが聲を揃へて

「わあーッ」ミ、さけびました。

びつくりして目をさました大工犬のおぢさん。

「おい、びつくりするぢやないか、だれだ、ああ、お前たちか、また、みんなしてお手傳ひをして呉れたのか、ありがたう、ありがたう。うむ、よしよし、みんなすわれ、けふはな、ひこつ、ごはんを食べる前に、面白いはなしをきかせてやらう。あるところにな、チリミいふ男の子ミポリミいふ女の子があつてな、それがお顔やからだは犬なんだが、不思議なことに、それがかかしなんだ。かかしミいふのは、みんなも知つてゐる通り、田甫の真中にただだまつて立つてゐて、なんにもしないんだ、わしがな、お前たちはお家のお掃除をしたこきがあるかきいたら、それはおばあさんのするこきだミいふんだ、朝のごはんが済むミすぐ、ぴおーいッミおそこへミび出して夜になるまで歸らないんだ。犬はやつぱり犬でなければいけない、かかしぢやない。でも、なまけるミすぐ、かかしになるんだよ。お前たちは仕合せミかかしでなくて犬だ。さあ、みんなて、犬

すよ。

「さうぢやないよ。わしだよ」

「さうぢやありませんよ。あたしですよ」

「わしだよ」

「あたしですよ」

「まあ、まあ、まあ、それはごつちでもいいことにして、早くチリボリを起して來なさい」

「さうだね、されされ」

「おばあさんは、チリボリのお部屋へ入つて來ました」。

ふたりとも、ぐつすり寢こんでゐます。

「これこれ、チリボリ、もう朝ですよ、早く起きないよ、

お父さんに叱られますよ、さあさ、お起きなさい、お起き

なさい」

「……………」

「……………」

「これこれチリボリ」

やがて、ふたつのおふさんがむくむくつゝ動いたかと思ふに、チリボリは急にお床のなかからはね起きて、おばあ

さんに抱きつきました。

チリは、青い洋服に縞のズボン。

ボリは、赤い洋服に格子のスカート。

「おやおや、お前たち、ゆふべ着物を脱いだ筈ぢやなかつ

たかい？」

「おばあさん、僕たち、今日からほんまの犬になつたんです、かかしぢやないんです」

「なに？、かかしぢやない？ほんまの犬？」

おばあさんは、なにがなんだか、ちつともわかりません。

チリボリのあまついで行つて見ますと、吃驚しました。

「おや、すつかりお掃除が出來てゐて、火が起つてゐて、

ごはんの仕立まで出來てゐるぢやないか。これは、だれがしたんだい？」

「犬です」

「かかしぢやないのよ」

*

チリボリは、この日から、かかしをやめて、本もの犬になりました。(完)